

(結果)

例の結果を③式あてはめると、

$$E = 1,000 - \frac{150 \times \left(\frac{5}{1} + \frac{6}{0.8} + \frac{4}{0.6} + \frac{5}{0.4} + \frac{10}{0.2} \right)}{\left(\frac{12}{1} + \frac{11}{0.8} + \frac{8}{0.6} + \frac{3}{0.4} + \frac{6}{0.2} \right)} \div 840 \quad (\text{答})$$

となり、答は正解 850 にきわめて近い。

この操作を50回くりかえした結果の答の誤差の頻度を図16に示した。答の平均は849.0、標準偏差は27.00、最大誤差は7.3%であった。また得られた答は、791～912の範囲にあった。

5 実例

天然幼魚を用いた標識放流を11月に試みた。用いた天然幼魚は、主に羽地内海で定置網や釣りによって漁獲したものである。漁獲した時期が遅かったこともあって、人工種苗に比べて尾叉長はかなり大きい(表6、図17)。次回以降行う場合は、時期を9月～10月に早めて、

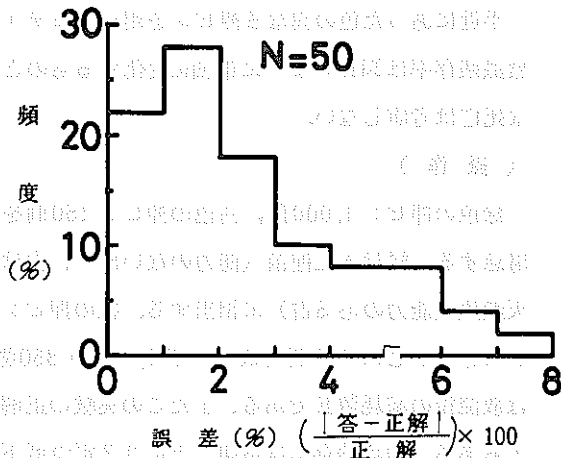


図16 モデル実験の答えの誤差の頻度

表6 ハマフェフキ天然魚の標識放流の状況

放流日	放流個体数	尾叉長(平均(mm), 標準偏差)	標識方法	放流場所
1984年 11月14～15日	86	142.12 ± 16.91	アンカータダ 25 mm※ E型ピン	B
11月27日	68	138.15 ± 11.62	アンカータダ 25 mm※ E型ピン	C
計	154			

※ 4桁の一連番号で個体識別をした。

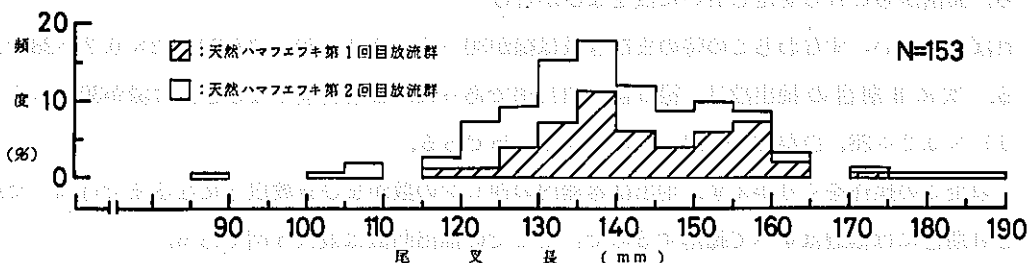


図17 天然ハマフェフキ標識放流群の尾叉長組成